

【複式部】教科提案

主体的に学び合う複式教育 ～機能するかかわり合いをめざして～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 複式部でめざす子ども像

学校提案では、めざす子ども像を「問い続け、質の高い学びができる子ども」とし、そのための学びを進めるために「創造的に思考したり、的確に判断したり、豊かに表現する主体的な能力をはたらかせせることが不可欠となる。」と述べている。

またOECD（経済協力開発機構）は、これからの社会に必要とされるキーコンピテンシー（主要能力）として、

- ① 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力（個人と社会との相互関係）
- ② 多様な社会グループにおける人間関係形成能力（自己と他者との相互関係）
- ③ 自律的に行動する能力（個人の自律性と主体性）

の3点をあげている。

この2つを見ていくとき、「主体的」というキーワードが浮かび上がってくる。これからの子どもは、教わったことを早く正確に覚え理解するだけでなく、自分たちが学びの対象に主体としての意識を持ってかかわり、また、授業においても互いに学び合う経験を積むことが重要になってくるだろう。

複式学級は、1時間の授業で直接指導と間接指導があり、特に間接指導において、子どもたちが主体的な学習ができる機会が大変に多い学習形態である。

こうしたことから、まず、主体的に学び合うことのできる子というのが複式部でめざす子ども像となるのである。

(2) 複式部における「学びの質の高まり」

学習集団として、思考の多様性・ひろがり深まりを生み、「学びの質の高まり」をめざすためには、指導者から教えられることを受動的に覚えるだけでなく、より細かく緻密に教材との対話をしていく必要がある。そのためには、指導者の言葉だけでなく、子どもたち同士が友だちの言葉を取り入れつつ、自分の言葉に置き換えて表現し伝え合うことが大切である。そうすることが、自分達の考えをより質の高いものに更新していくことになるのである。その営みを子ども一人一人が主体的にくりかえし、互いの良さをつなげることが必要である。

他者と対話し、そこで得た新たな視点や疑問・知識・技能を生かして、対象と、また自分と対話する、つまり、複式学級の学びでは、学習課題に対する互いのかかわり合いがうまく機能することにより「学びの質の高まり」が期待できると言えるだろう。

機能するかかわり合いとは、「子どもたちが、感じたことや考えたことを話し、相手の考えを聞き、そこに自分の考えを加えて伝える。そして、それを意欲的に繰り返し課題を解決していこうとする状態」であると定義する。

複式学級は、少人数・異学年編成という特性から一人一人のより濃密なかかわり合いや異学年とのかかわり合いが可能である。その特性を生かして、一人一人が互いにかかわり合い、主体的に学ぶことで、質の高い学びを成立させることが複式教育のめざすところである。

そこで、複式部では、本年度研究テーマを「主体的に学び合う複式教育～機能するかかわり合いをめざして～」と設定した。

3. 研究の展望

子どもの学びは「対象との対話」「自己との対話」「他者との対話」の3つの対話が三位一体でなされるものであるが、複式という学習形態の特性を生かし「他者との対話」という

ことを視点の中心とし、児童のかかわり合いについて研究を進めていく。

研究テーマを「主体的に学び合う複式教育」と設定したが、「他者との対話」という子どもたちの学び合いには、基本的に3つの学び合いがあると考えている。それは、

- ①話し言葉による考えの交流
- ②書き言葉による考えの交流
- ③非言語的なコミュニケーション

である。①は一般的な「話し合い活動」と言われるようなものである。それに対して、友だちの作品やノート、ワークシート、小黒板、板書などを通して友だちの考えや意見、表現を交流し合うことが②の書き言葉による考えの交流である。

そして、③は、友だちの発言をしっかりと聞きうなずいたり見つめたりするといった反応や互いに対等に話し合い、どのような意見も受容的に聞き合うことといった情意的なものである。ここには、各クラスの学習文化や学習スタイルも含まれるであろう。

本校複式部では、児童の司会記録係をたて自分達で授業を進める学習形態を低学年から作り上げてきている。そういった面では話し言葉による考えの交流はある程度できていると言えるだろう。

しかし、今までの取り組みは、司会・記録係を中心とした主体的な学習をどのように進めるかといった点に重点が置かれていた。そうしたことから今年度は、フォロワーを含めたかかわり合いということに視点を定め、複式学級での学びの質の高まりを追求していきたいと考えた。つまり、上記のうちの②書き言葉による考えの交流と③非言語的なコミュニケーションの部分を中心に、かかわり合いが機能することで、どのように質の高い学び合いができるかを検証していくわけである。

具体的には、以下のようなものを想定している。

- 学び合いが生きる学びの場の設定
- 学び合いが生きる異学年交流の設定
- 学び合いが生きるワークシートやノート・小黒板の活用
- 学び合いが理解を深める学習課題や発問のあり方
- 学び合いを子どもたち自身が振り返る自己評価や相互評価のあり方
- 話し合いが効果的に行われるための話型指導のあり方

3. 成果と課題の把握の手立て

研究の検証方法については、以下の点についてビデオ、録音、授業記録、児童の書いた文章などを通してできるだけ客観的に行う。比較は、年度当初と年度末の類似した単元同士で行うこととする。評価の観点は以下の2点である。

- ①…子どもたちの交流学習の場における話し合いにおいて、司会・記録係を含めたフォロワー同士のかかわり合いがどの程度増加したか。
- ②…「かかわり合い」が機能したことで、子どもたちの学びの質が全体的にどう高まることができたか。

①の評価については、1つの課題についてどれだけの発言が重ねられているのか、発言者の偏りに変化があったのか等で検証していく。

②の評価については、数値的な評価はできないので、「〇〇くんの意見は～で、それは～だ。」「〇〇さんの意見を聞いて思ったんだけど、～。」「さっきの〇〇くんの意見に付け加えて言うと、～だと思えます。」といった、アプロプリエーションがどの程度起こっているのかということや、授業の展開や文脈を聞きながらそれをまとめた発言がなされているかといったことを含めて、教科としての学びの質が高まったかを検証していく。

※アプロプリエーション…友達の見解を「道具」として自分の意見を組み立てていくこと。